

静岡県立大学附属図書館

シリーズ 私の一冊の本

経営情報学部 大久保 あかね 先生

和辻 哲郎 著

『古寺巡礼』(初版)

閲覧室1階 080//C44//1256 筑摩書房

学生時代を奈良で過ごしました。キャンパスは、東大寺も興福寺も徒歩圏内で、部活でグラウンドを走っていると小鹿が伴走してくれます。

和辻哲郎の『古寺巡礼』は、そんな環境で学ぶ女子大学生にとって暗黙の必携書でした。

奈良市内であれば徒歩や自転車で、国鉄やバスを使えば1時間程度で法隆寺や薬師寺、唐招提寺などの名刹に行くことができます。週末や講義の空き時間を使って、様々な古寺を巡りました。もちろん『古寺巡礼』を携えて、と言いたいところなのですが、当時の私にとっては、なんとも難解でした。

ところで、母校では1年次の教養科目に「美学美術史」という、薄暗い教室でひたすら仏像のスライドを見る講義がありました。テーマは「仏像の神秘性を表現するルールと、美術品としての価値」だったように思います。仏像は千数百年前の仏師たちが細かなルールに忠実に作り上げた作品であり、多くの人々の祈りによって醸成された価値がある、と学びました。そして教室で眺めたスライドと違い、薄暗い本堂で仏様と向き合うと感じる、あの「しん」とした瞬間が好きになり、とにかくたくさん仏様に会うために、様々な古寺に通いました。

今でも一番好きな仏様は、浄瑠璃寺の吉祥天です。それは美しく、透き通るような色白で、ふっくらとした頬。衣装も、身に着けているアクセサリも華やかで、一目見て虜になりました。間違いなく日本で一番美人な仏像です。ぜひ一度、浄瑠璃寺に会いに行くことをお勧めします。

和辻哲郎も京都から奈良に到着したその翌日に浄瑠璃寺に足を運んでいます。

『古寺巡礼』の初版が発行されたのは1919年、和辻哲郎が美術研究を志した20代後半に奈良の寺社を旅した「印象記」です。つまり100年前に20代の若者が書いた本です。ところが仏像や寺の伽藍はもちろんのこと、寺に向かう道筋や風景、沿道の街並み、空気感まで、今現在の奈良でも違和感なく当てはまってしまうことに驚きます。

不思議なことに学生時代には数ページで挫折したあの難解に思えた文体は、今読むと初々しいエネルギーが感じられ、描写にも共感するばかり。あの薄暗い教室で学んだ講義もよみがえります。卒業後30数年かかりましたが、『古寺巡礼』がようやく本来の意味での必携書になりました。次の奈良旅行が楽しみです。